

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<実践記録> 公立幼稚園における特別支援園内研修 の実践記録(5) : 保護者への個別面接のふり返り

著者	藤枝 静暁, 森田 満理子, 新井 邦二郎
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	15
ページ	215-222
発行年	2015-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000170/



公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録（5）

— 保護者への個別面接のふり返り —

A Practical Study of In-Service Teacher Training in Special Education at a Public Kindergarten (5)

A Review of Consultation with Parents in the Kindergarten

藤 枝 静 暁・森 田 満理子・新 井 邦二郎

FUJIEDA, Shizuaki MORITA, Mariko ARAI, Kunijirou

1. はじめに

東京都北区には公立幼稚園が6園ある。2011年度より、各園にて、特別支援教育の充実を目的とした特別支援園内研修が年間5回行われている。臨床心理士の有資格者が特別支援園内研修を担当している。第一筆者は2011年より、JR王子駅に近いA幼稚園（以下、A園）にて特別支援園内研修を担当している。第二・第三筆者は第一筆者のスーパーバイザーである。その内容は保育所（園）や幼稚園で導入されている巡回相談や文部科学省が幼児教育支援センター事業の中で取り上げている保育カウンセラーの職務と同様である。

2. 問題と目的

今日の保育現場では特別な支援を必要とする障害児、気になる子ども、健常児と多様な子どもを一緒に保育することが求められるようになってきている（藤枝・森田・新井, 2013）。対応の難しい子どもやカウンセリングを必要としている保護者の増加に伴い、保育者が専門家からのアドバイスを必要としている（竹中, 2008）。

こうしたニーズにいち早く対応を始めたのが東京都文京区の「子育て支援カウンセラー事業」である。この事業は2002年度より開始され、全ての区立幼稚

園・保育園に月に1回程度、子育て支援カウンセラーが派遣されている。子育て支援カウンセラーを務めているのは、文京区教育センターに所属する臨床心理士である。文京区教育センター（2006）によると、その頻度は幼稚園で月に1回、保育園は各園と相談し回数を決定している。その役割は、子どもや保護者、教員および保育士に対して相談支援を行うことである。2006年度の幼稚園における総相談件数は879件、保育園では528件であった。なお、2011年度からは区内の私立幼稚園・保育園にも、子育て支援カウンセラーを年に3回程度派遣している。

2003年度には、大阪府と私立幼稚園連盟が連携し、「キンダーカウンセラー事業」を開始した。この事業は文部科学省のスクールカウンセラー事業をモデルとしており、臨床心理士といった専門家を幼稚園に派遣している。その内容は①園児観察によるアセスメント、②保護者へのカウンセリング、③保育者とのコンサルテーションである。私立幼稚園連盟に加盟している幼稚園412園のうち、初年度は47園、2005年では82園、2011では107園がこの制度を利用しており、徐々に拡大している。なお、大阪府の事業にならい、京都府私立幼稚園連盟も2009年度より、キンダーカウンセラーの派遣事業を開始している。

文部科学省は2005年度より、幼児教育を地域に開

キーワード：幼稚園、特別支援教育、保護者面接

Key words : kindergarten, special education, parents counseling

かれたものにしていくとともに、地域で幼児教育の振興のための取り組みを支援するために、幼児教育支援センター事業を開始した。その具体的な内容は、保育カウンセラー等の専門家による幼稚園や家庭等への支援である。2006～2007年度は、千葉県千葉市、東京都日野市、愛知県半田市、三重県鈴鹿市、広島県広島市、大分県大分市、宮崎県延岡市が幼児教育支援センター事業の指定地域となり実践されている。

その一例として、東京都日野市は「日野市の幼児教育の振興－保育カウンセラーによる子育て支援体制の充実と日野っ子の幼・小連携カリキュラムの編成－」という名称で、市内の公立幼稚園5園、私立幼稚園1園、保育所2所、小学校18校が参加して事業を進めている。保育カウンセラーは上記の園・所に配置され、月に一度、担当する園・所に勤務している。日野市の保育カウンセラーを担当している坂上（2011）によれば、保育カウンセラーの役割は①保育時間中の子どもの観察、②保護者への個別相談、③保護者を対象とした講演会などの実施、④保育者とのカンファレンス、⑤地域の子育て支援の5つである。保育カウンセラーを導入したことで、保育者の子ども理解が深まる、理解に基づくかかわりの手だてが広がったといった成果があったと述べられている。

このような実践的事業を経たうえで、文部科学省（2008）は幼稚園教育要領解説の中で「子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力を配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」と明文化するに至った。こうした役割を果たすための一例として、全国の幼稚園において実際に行われている子育て相談（現職教員、教職経験者、大学教員、カウンセラーなどによるもの）をあげている。

しかしながら、大学教員といった個人による保育現場を支援する臨床心理的活動の報告や研究は少ないのが現状である。この状況の中で、貴重な報告をしているのが大鶴（2008）である。大鶴（2008）は

自らが勤務する私立短期大学の附属幼稚園における相談員を務めていた。附属幼稚園への訪問頻度は、週1回であり、活動内容は①子どもの行動観察と直接的な関わり、②保育者への支援、③保護者の相談窓口、④研修会への参加、⑤情報提供の5つである。大鶴が実践を始めたきっかけは、もともとボランティアとして附属幼稚園に出かけ、相談に乗っていたことであったという。そうした下地があったことに加えて、園内に個別的な配慮が必要な子がおり、具体的な子どもへの関わり方、また、実際に子どもがいる場面や子どもの状態を見ながら助言がほしいという幼稚園からの要望があったと述べている。大鶴は自らの相談活動の特徴として、短期大学部と附属幼稚園という関係性があるゆえに動きがとりやすかったこと、園からの相談員に対する希望が明確であったこと、訪問頻度が週1回と高いことから、保育者、子ども、保護者に対して密な関わりができたことと述べている。

このように心理の専門家が保育現場に入り、保育や子育てを支援することが広がりつつあると言える。こうした支援は保育者だけでなく、子どもと保護者にとっても有意義だと思われる。なぜならば、幼児期は自律と社会化が心理発達上の重要なテーマとなるが、これは第2の分離・個体化と言われる青年期の課題とも重なり、この時期をどう過ごすかが青年期やその後の人生の有り様を大きく左右することになる（管野, 2004）からである。

児童期や思春期以降における問題も、幼児期からの連続性において発生していることを見逃してはならない。管野（2004）は、不登校や学級崩壊、あるいは非行、暴力行為といった問題の遠因を乳幼児期からの育ちにあると指摘している。また、発達障害といじめ被害の関係（三島, 2014）、発達障害と不登校の関連性（石崎, 2015）も指摘されている。ならば、家庭での子育てを支援すること、発達障害のある子どもとその親に対して、早期に必要な療育や支援をすることによって、将来のリスクを軽減できる可能性がある。

こうした状況を踏まえると、今後、保育現場におけるカウンセラーの重要性が増すと共に、幼稚園や家庭からの保育カウンセラーやキンダーカウンセ

ラーへのニーズも増えると予測される。その際には、新たに保育現場で活動するカウンセラーも増えるだろうし、既にその任務を担当しているカウンセラーも多様なニーズや課題に対応できるように実力を研鑽する必要があるだろう。

小川（2014）は2003年度から始まったキンダーカウンセラーの活動と研究を概観した上で、上記と同じ2点を今後に向けての課題と指摘している。これらの課題に対して、各自がまずできることとして文献を読み、学ぶことの重要性を指摘している。また、キンダーカウンセラーの活動文献が多いとはいえ、研究成果を公表していくことによって自身の力量の向上をはかること、その後のキンダーカウンセラーの育成にかかわることを自覚しながら活動することが必要とも指摘している。

筆者らは2011年度の着任以来、特別支援園内研修の活動について毎年テーマを設定し、紀要論文として報告してきた（藤枝・森田・新井, 2011; 藤枝・森田・新井, 2012; 藤枝・森田・新井, 2013; 藤枝・森田・新井, 2014）。各論文の概要であるが、藤枝・森田・新井（2011）では、北区の幼児教育と特別支援教育の概要および特別支援園内研修の役割と機能を中心に報告した。藤枝・森田・新井（2012）では、A園が地域に住んでいる就学前の子どもとその保護者を対象に行っている未就園児の会に注目し、そこでの特別支援園内研修が果たしている役割について報告した。藤枝・森田・新井（2013）では、A園と同区内にある専門療育施設との連携において第一筆者が果たした役割、また、連携が保育にもたらす効果について報告した。藤枝・森田・新井（2014）においては、平成23年度から平成25年度までの3年間の活動をふり振り返り、特別支援園内研修の経験から学んだことと気がついたことを整理し、今後の課題を明らかにした。小川（2014）が述べているように、自らの活動を振り返り、公表してきたことは有意義なことであった。

本論文では保護者への個別支援について報告する。その理由は保護者への個別支援は保育カウンセラーやキンダーカウンセラーの重要な職務の一つである（文部科学省, 2004; 管野, 2004）にもかかわらず、保護者への個別相談に焦点をあてた論文は少ないからである（栃原, 2011）。実際、筆者らもこれまでこの

テーマを取り上げたことは無かった。これまでに第一筆者が行った保護者への個別相談について振り返り、その役割と課題を考察する。

3. 先行研究における保護者への個別相談に関する知見について

(1) 基本姿勢

管野（2004）はキンダーカウンセラーとしての経験を踏まえた上で、保護者に対する個別相談の基本的姿勢として、問題の意味を親と一緒に考え、できるだけ親がその悩みに立ち向かい、自分で解決していける方向を目指すとして述べている。

同じくキンダーカウンセラーである栃原（2011）は、母親の話を直接じっくりと聞くこと、その心に寄り添いながら、子育てを面と向かって応援する存在が、行き詰まった子育てをひも解く役割を果たすと述べている。

つまり、保育カウンセラーは、カウンセリングの基本である受容、傾聴、共感といった寄り添う姿勢が求められると言える。

(2) 実践の場で求められるもの

管野（2004）はキンダーカウンセラーによる親との面接は、一般のカウンセリングよりも、アドバイスの比率が高くなる傾向にある。比較的健康度の高い親が多く、ちょっとした助言で、自らの力で問題解決に向かっていくことが多いからである。原則に従って、非指示的な対応のみに終始すると、むしろ不信感を頂いたままの中断になってしまう危険性がある、と指摘している。

同じくキンダーカウンセラーである竹中（2007）もまた同様のことを指摘している。竹中（2007）は、保護者への面接について、カウンセリングと銘打っていても保護者自身が1回の面接で解決を望んでいることが多い。幼稚園でのカウンセリングは、子育て相談の意味合いが強く、通常のカウンセリングよりも助言の比率が高くなると述べている。

大鶴（2008）は、基本的には親が自分の思いを十分語れること、親が自分で結論を出していくことをサポートしている。「こうした方がよい」というアドバイスは一見援助的に見えるが、長く続いていく親子の関係を考える際に親が自分で考え、自分なり

によりよい対応で関わっていけることが大事だと大鶴は考えている。そのため、親が混乱している場合や先が見えなくなっている場合は具体的なアドバイスをすることもありますが、今まで筆者が関わった子どものことや将来についての情報提供をしながら親が自分で考えていけるような援助の枠組みを大切にしている、と大鶴は述べている。

こうした報告から、各自が保育カウンセリングに臨む際に、保護者へのかかわり方についての基本姿勢を定めていることが分かる。その上で、相手の状況や様子を観察しながら、臨機応変に判断していると思われる。

ただし、その姿勢は、キッズカウンセラー事業という組織の一員である場合と、個人で活動している場合では異なる可能性があるだろう。

(3) 実際の面接回数について

栃原(2011)は延べ7年間のキッズカウンセラーとしての活動における個別相談106名を内容と回数で集計し、3つにグルーピングしている。相談回数に着目すると、1回のみが66名(62.3%)、2回で終了が17名(16%)であり、その両方で約8割を占めていた。栃原は保護者は1回の面接で解決することを望んでおり、実際、1回で終了となるケースがほとんどであったと述べている。

この結果は、管野(2004)と竹中(2007)の指摘と一致している。保育カウンセラーが保護者への面接を行う際には、こうした傾向があることを念頭においておくとうまいだろう。

(4) 実際の面接内容について

栃原(2011)によると、子どものしつけに関することと子どもの性格に関することがそれぞれ23名(21.6%)と最も多く、全体の約4割を占めていた。ついで、子どもの発達と、自分の育児のあり方に関する相談がそれぞれ14名(13.2%)であった。やはり、育児のことも含め子どもにからんだことについて相談に来られる方が圧倒的に多いと言える述べている。

この報告を踏まえると、保育カウンセラーが保護者への面接を実施する上では、カウンセリングそのもの

の知識や技能の習得だけでなく、子どもの発達段階毎の発達課題、親子関係の基礎となる愛着など発達に関わる学びが欠かせないと言える。

なお、小川(2014)と栃原(2011)が指摘するように、自らの保育カウンセリングの業務内容を明らかにしている研究は少ないのが現状である。各カウンセラーはこの課題を念頭に置き、自らの活動や研究を公表していくことが期待される。

4. 第一筆者による保護者への個別相談について

これまでに、第一筆者が副園長の同席のもと、保護者と個別面接をしたのは2件であった。2件共に、在園児の母親からの申し込みであった。面接場所は、プライバシーを保護するために、保育室とは別の部屋を使用した。面接時間は、昼食後から降園までのおおよそ30分間～1時間であった。個人が特定されない範囲で事例の概要を示す。

(1) 事例1

内容は子どもの言動に関することであった。母親は約束の時間よりやや早めに到着した。あいさつを交わしている時から、母親は穏やかな表情であった。その様子から、母親は深刻な相談をしたいというよりも、気になることを聞いて欲しい、ちょっとしたアドバイスが欲しいというニーズがあるように感じた。母親の話聞きながら、この見立てが概ね間違っていないことを確認した。その後、話題に沿って、主として副園長が遊び場面、準備や片付け場面、昼食場面など場面毎に子どもの様子を伝えた。母親は聞きながら、笑顔で「まあ、そうなんですか」など感想を述べていた。その後、主として第一筆者から、子どもが現在クリアできている発達課題とこれから取り組んでいく必要のある発達課題について伝えた。その際は、母親が理解しやすいように、発達課題という言葉を使わずに具体的な行動を伝えた。面接の終盤で、母親より、家庭の中での子どもへのかかわり方についてアドバイスを求められたので、第一筆者から実行可能と思われることを一つだけ提案した。

面接は終始、穏やかな雰囲気の中で行われた。母親は面接開始時と終了時に「お願いします。」「お時間を取って頂き、ありがとうございました」と述べ、礼儀正しい姿であった。

(2) 事例2

内容は子どもの発達に関することであった。両親はそろって約束の時間ちょうどくらいに到着した。あいさつを交わしている時から、父親と母親の表情や様子が異なっていた。父親の表情は堅く、緊張していたのに対して、母親はさっぱりした表情でさほど緊張していない様子であった。第一筆者が父親に対して平日の来園をねぎらう言葉をかけたところ、堅い表情のまま「今日は休みをとって来ました」とのことであった。

面接が始まると、父親からの発話や質問がほとんどであった。面接中、父親の表情は硬いままであった。母親はあまり語らず、父親が話すのを見守っているように見受けられた。こうした様子から、母親は子どもの発達について自分なりの納得や回答を得ているが、父親はそこまでには至っていない様子であった。父親は自分自身が納得していないことについて明らかにしたいという気持ちで来園したと感じられた。一方、母親は父親にも自分と同じように子どもを理解してもらいたいという願いが有り、夫婦での面接を希望したように感じられた。

第一筆者は父親の発言を傾聴しながら、納得いかない点、気になっている点を把握するように努めた。父親からの質問に対しては、受容するだけに止まらず、副園長または第一筆者が丁寧に回答するように心がけた。副園長は保育中の子どもの様子を中心に、第一筆者は発達の観点から話をするうちに、父親の固い表情が徐々に和らいでいった。最後には、父親は「わかりました。家に帰って、もう一度夫婦で話し合います」と言い、終了となった。この面接の後、しばらくしてから、夫婦が納得して出した結論をA園に伝えてきた。

(3) 面接後の様子

先行研究において幼稚園の保護者の相談は1回で終結することが多いと指摘されている通り、2事例共に1回で終結した。

藤枝・森田・新井(2014)で記したように、A園では保護者が子どもの送り迎えを行っている。それゆえに、毎日、保育者と保護者が顔を合わせる事ができるという利点がある。第一筆者も降園場面に

立ち会い、親子の様子を観察したり、挨拶を交わしている。個別面接後、両事例の保護者と第一筆者は短時間であるが降園時に必ず子どもについて会話をするようになった。内容は、「最近では家で・・・をよくするんです」と子どもの様子を話したり、「私も、家では子どもに・・・しているんです」と自分の様子を話してくれるようになった。第一筆者も保育観察中に該当児について気づいたことや、成長を感じたことなどを具体的なエピソードとともに伝えている。

5. 個別相談のふり返り

個別相談について、第一筆者と副園長の2者の視点からふり返る。

(1) 第一筆者によるふり返り

2つの事例の保護者は、子どものことで第一筆者に相談したいというニーズを持っていた。そこで、まず、相談の日時を迅速に決定することが保護者のニーズを満たす第一歩だと考えた。今回、面接申し込みを受理した副園長が第一筆者にすぐに連絡したおかげで、あまり間を置かず面接を実施することができた。また、面接の前に、副園長と第一筆者は電話を利用して、最近の子どもの様子についての情報交換、保護者のニーズの見立て、面接場面での役割分担、面接の方向性について打ち合わせを行うことができた。第一筆者は非常勤であり、勤務日が限られているゆえに、副園長の迅速な連絡と連携が有効であった。現時点で、保育カウンセラーの多くは非常勤であろう。保育者と保育カウンセラーは常に顔を合わせていないからこそ、個別面接を実施する際には、連携や事前準備が欠かせないと思う。

大鶴(2008)は、相談に来る保護者は保育者に相談する内容と相談員に相談する内容を分けて考えているようである。自分の思いを十分に聞いて欲しいとき、今の保育ではなく将来についての見通しなどを話したい時に、発達や障害についての知識を持っている専門家、あるいは保育者ではなくカウンセラーという専門家として利用していると考えられると述べている。つまり、保護者からのニーズに対して保育カウンセラーは専門家として対応することを期待されているのである。今回、第一筆者が専門家

としての意見や見立てを伝えたことに加えて、副園長が保育中の子どもの様子を伝えたことによって、保護者が聞きたい情報にきめ細かく対応できたのではないかと考えている。

事例2の父親は平日に仕事を休んで面接に来た。この父親が面接中に多くの質問をしたことと合わせて考えると、「今日せっかく来たのだから、今日のうちに解決したい」というニーズを持っていたと想像できる。この父親に対してカウンセラーが受容的態度に徹した場合、「せっかく行ったのに、解決できなかった」という欲求不満状態に陥る可能性がある。実際にこのような状況を経験した竹中（2007）は、幼稚園でのカウンセリングのあり方について、問い直しを迫られたと述べている。このような場合は、管野（2004）や竹中（2007）が指摘するように、カウンセリングの中でアドバイスをすることが必要になると思われる。

一方で、保護者への面接においては、前述したように「こうした方がよい」というアドバイスは一見援助的に見えるが、長く続いていく親子の関係を考える際に親が自分で考え、自分なりによりよい対応で関わっていけることが大事である（大鶴, 2008）という指摘も重要である。つまり、幼稚園におけるカウンセラーは保護者との個別面接を行いながら、非指示的に関わるか、指示的に関わるかを判断していかねばならない。そのためには、日頃から自己研鑽を積むのはもちろんのこと、スーパービジョンを受けることも必要である。

（2）副園長によるふり返り¹¹

特別な支援が必要である幼児の保護者が、我が子の発達の状況を受け止めることは容易ではないと思います。親は、幼児期だけではなく、その子の人生を共に歩んでいくのです。したがって、保護者対応には、かなり慎重になります。

発達に障がいのある幼児への指導は、保育者の経験知のみでは、望ましい手立てが見つからないことを私は自覚しています。さらに、自分がアドバイスできる限界を感じておくことも必要だと思っています。ですから、心理の専門家である藤枝先生と、共に、面接をしたいと強く希望いたしました。

実際、保護者に「保育カウンセラー」との面談を伝えると、保護者は「何を言われるのか」と心配されていたと思います。ですが、私は藤枝先生の「対応の仕方」が予想でき、保護者にマイナスになるような面談になることはないかと確信していました。保育カウンセラーだからといって誰でもよいのではなく、こちらが自信をもって繋ぐことができる人ではないと保護者には紹介できません。

藤枝先生の対応は、予想以上でした。突然、絵本を持ち出して、保護者に一緒に読むようになげかけた時は驚きました。藤枝先生が絵本を読むと、固くなっていた保護者の表情が和んでいったのが印象的でした。ユーモアで和ませたことは保護者の緊張をほぐしていきました。また、事前に私と藤枝先生との打ち合わせにおいて、保護者の職業や人柄などの情報も提供をしていたこともあり、藤枝先生がその情報を利用して保護者に話題をもちかけ、話しやすい状況にしていたのもさすがだと思いました。

面談は、和やかながらも、藤枝先生は幼児の発達課題などを専門的に説明していただき、丁寧に対応していただいたことで、保護者も少しずつ我が子の発達を受け入れていったと思います。しだいに保護者は、藤枝先生に、自分の悩みを伝えはじめ、具体的な手立てなども質問してきました。私（保育の専門家）としては、保護者の悩みは聞けるものの、「具体的な手立て」に関しては自信がないので、心理の専門家が、アドバイスをしてくださるのは安心感がありました。私の方から保護者には、保育の場での他児とのコミュニケーションや保育場面における課題を伝えました。こうして、心理の専門家とともに、保育や家庭での支援の仕方を考えられたことは、幼児の支援において最善の方法を見出すことにつながったと思います。

保護者が我が子の発達を受けとめて、アドバイスされたことを家庭で実際に行ったことで幼児は随分成長しました。成長が見えると、保護者はまたアドバイスを求めてくるようになります。支援への手ごたえと、保護者自身が変わったことを自覚し、前向きな気持ちになれたことを保護者も感謝していました。

保育の専門家と心理の専門家が、それぞれの専門

性を生かし、互いの専門性を認め、保護者の心に寄り添いながら丁寧に対応できたことが、今の状況に繋がったのだと思います。

6. おわりに

2事例ではあるが、第一筆者が行った個別相談をふり返った。面接を通じて、一定の程度ではあるが、保護者の相談へのニーズに応えるとともに、保護者との間に信頼関係を築くことができたと思う。この背景には、①保護者とA園の保育者との信頼関係があり、その延長として第一筆者は保護者と関係づくりができた、②第一筆者と副園長の間で機能的な連携ができた、③先行研究からの知見を踏まえて、第一筆者が心理の専門家として臨むことができた、ことがあったと思う。

上述の他に、第一筆者が個別面接において心がけていることは次の2点である。

第一には、毎日子育てに取り組んでいる保護者を認め、勇気づけることである。たとえば、事例1の母親が面接の最後にアドバイスを求めたことに対して、実行可能と思われることを一つだけ提案した。アドバイスを聞いた母親が「そんなの無理」と絶望感を抱いたり、帰宅後「カウンセラーに言われたとおりにやらなくては」と強迫的な感情を抱くようなことが無いようにと考えたからである。面接を通して、保護者が子どもだけでなく自らの成長にも気がつき、子育てにポジティブに取り組めるような支援をしていきたいと考えている。

第二には、保育現場の動向に目を向けることである。今回の2件の面接は共に1回で終結した。これは先行研究でも指摘されているとおりであった。しかし最近では、幼稚園の保育期間が変化し始めていることから、今後はこの傾向が変化する可能性があると考えている。具体的には、保育期間が従来の2年または3年よりも長くなってきているのである。私立幼稚園の中には、プレスクールや未就園児クラスといった名称のクラスを設置し、3歳未満の子どもが週に1回～数回登園しているところが増えてきている。公立幼稚園においても、従来は2年保育が主流であったが、3年保育に変更したところも出てきている。

子どもの在園期間が長くなれば、保護者が子どもの発達や子育てについて悩み、保育カウンセラーに面接を求める機会も増えると予想される。つまり、幼稚園における保護者への面接が1回で終結とならず、複数回に渡る可能性も出てくるだろう。その際には、初回面接の在り方、面接の頻度、一回の面接の時間、面接構造などを十分に検討した上で継続面接に臨む必要があるだろう。

保育現場の変化に伴って、保育カウンセラーの役割や仕事内容も変化する可能性があることを念頭に置きながら今後の業務に臨みたい。

注

1) 第一筆者が副園長にふり返りの執筆を依頼した。その原文ママを掲載した。副園長は人事異動により、H27年度より他園にて副園長を務めている。

引用文献

- 文京区教育センター 2006 文京区教育センター紀要第41号。
- 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎 2011 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録 川口短大紀要, 25, 165-174.
- 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎 2012 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録(2) 川口短大紀要, 26, 167-177.
- 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎 2013 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録(3) 川口短大紀要, 27, 223-232.
- 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎 2014 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録(4) - 3年間の活動の振り返り - 埼玉学園大学臨床心理カウンセリングセンター紀要, 1, 14-20.
- 石崎優子 2015 発達障害の認知の偏りと不登校(特集 不登校と子どもの体) 教育と医学, 63(5), 415-421.
- 管野信夫 2004 幼稚園における子育て支援-キンダーカウンセラーの活動- 臨床心理学, 4(5), 600-605.
- 三島浩路 2014 中学生の「いじめ」被害と発達障害傾向・学校適応 中部大学現代教育学部紀要, 6, 25-33.
- 文部科学省 2004 中央教育心理学会幼児教育部門

資料.

- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説.
- 小川恭子 2014 キンダーカウンセラー活動の現状
：研究動向と今後の課題について 花園大学心理
カウンセリングセンター研究紀要 8, 41-49.
- 大薊香 2008 保育現場を支援する臨床心理的活動
－附属幼稚園における相談員としての実践から－
筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要,
3, 235-246.
- 坂上頼子 2011 報告 日野市保育カウンセラーの
活動の実際 子育て支援と心理臨床 vol.4 福
村出版 54-58.
- 竹中美香 2007 幼稚園におけるキンダーカウNSE
ラーの役割についての一考察 東大阪大学・東大
阪短期大学部教育研究紀要, 4, 87-90.
- 竹中美香 2008 幼稚園におけるキンダーカウNSE
ラーの役割に関する研究－アンケート調査からみ
たキンダーカウンセラー事業のあり方－ 東大阪
大学・東大阪短期大学部教育研究紀要, 6, 9-17.
- 栃原京子 2011 キンダーカウンセリングにおける
保護者面接の一考察－母親の個別相談の実態から
支援の在り方を考える－ 近畿大学臨床心理セン
ター紀要, 4, 45-57.

付記

本論文はA園の園長および副園長の許可を得た上
で執筆された。

謝辞

本論文に目を通し、指導して下さったA園の園
長に感謝申し上げます。ふり返りの執筆依頼を快
諾して下さった副園長にも感謝申し上げます。
また、協力して下さった保護者様に深く感謝申
申し上げます。

H27.9.16 提出